

# 笠原莉花子

## profile

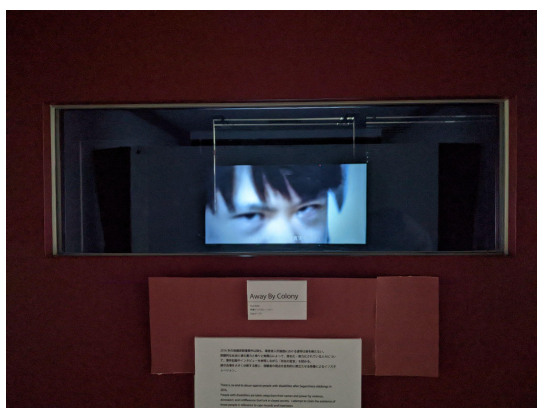
2000年神奈川県生まれ。東京芸術大学先端芸術表現科に在籍(2024年卒業予定)。  
ダウン症の妹を持つことから、障害児者のコミュニケーションや生活現場に関心を持ち、そこから  
見えてくる複雑な社会構造をテーマに、映像インスタレーション作品を制作している。

## works

### 《Away By Colony》(2022)

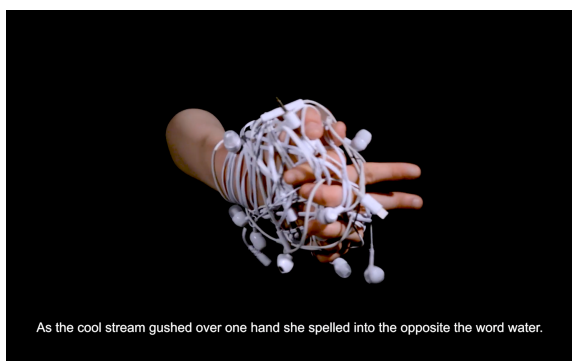
2016年の相模原殺傷事件以降も、障害者入所施設における虐待は後を絶たない。閉鎖的な社会に潜む暴力と侮りと無関心によって、匿名化・無力化されている人々について、事件記録やインタビューを参照しながら「存在の宣言」を試みる。展示会場を大きく分断する壁と、傍観者の視点を批判的に際立たせる映像によるインスタレーション。

(アヴニールプロダクション所属の吉田葵さんと宮崎礼椰さんご出演)



### 《untang // le》(2021)

ヘレンケラーの自伝『わたしの生涯』の一部を、イヤホンで両手を拘束された状態での手話(指文字)と、吃音症を持つナレーターの朗読によって語る映像作品。障害の有無に関係なく、だが障害のある人が特に直面する「伝達すること」の難しさや、それに伴う身体の足掻きを表現している。「何事も十全には語り得ないが、それでも沈黙を選択しない」というメッセージを込めた。



on going

《Dead End》(制作中)

この作品は「知的障害者が生まれなくなった未来」で起こりうることを描いた映像インスタレーションである(24年1月東京都美術館にて発表予定)。

出生・着床前診断の問題を皮切りに、障害者の自立生活について考える。近未来の日本を舞台とし、診断を受ける予定/あるいは自身が診断を受けた上で生まれた女性と、知的障害のある中年男性の交感を描いたフィクショナルなナラティブを軸に、インタビューやドキュメント等も参照し、戯画的な映像演出を織り交ぜることで、優生思想の蔓延る深刻な現状に強くしなやかに対決していく姿勢を示す。

作品制作の背景には、体外受精によって生まれ、知的障害のある妹を持ち、卒業後本格的に「親亡き後」問題に向き合う作家の「(障害者の存在を出生から静かに否定する)この社会では生きていけない」という当事者としての切迫感がある。

また「公益」という題目で広がっていく優生思想を、公立の美術館で批判的に検討することは強い意味性が宿るだろう。卒展会場までの主要経路である上野駅や東京都美術館はバリアフリー設備が充実しているが、その「公」に障害者の居場所が確保されているのは、70年代に繰り広げられた当事者たちの激しい闘争の賜物である。この前提に立ちながら、「鑑賞者としての障害者」を当たり前なものとして想定し、インスタレーションを設計する。

---

現在、作品のリサーチとしての意味はありつつ、同時に卒業後の自分と妹にとってより良い生き方を模索するため、さまざまな実践を行なっている当事者や福祉施設を訪ねています。

また、作品の出演や撮影や搬入出などの人手をはじめとして、障害当事者にとって鑑賞しやすい映像インスタレーションの構築や、英語翻訳、ステートメント・契約書類関係の相談に乗ってくださる方を探しています。

もしご協力・ご紹介頂ける方がいましたら、こちらのメールアドレス([s1120194@fa.geidai.ac.jp](mailto:s1120194@fa.geidai.ac.jp))までご連絡をお願いいたします。

笠原莉花子